

## B-3. 様々な素材に触れながら、試行錯誤し、イメージを実現させていく中で 重原幼稚園（愛知県刈谷市）〈5歳児 6月〉

### 「どうやって作ろうかな？」

#### 〈遊びのきっかけ〉

女兒がご馳走作りを使うための、ボタンを出しておいた。新しい材料に興味を持って見ている。

#### 「ぼくは〇〇が作りたい」

R児「これ使ってもいい？」  
教師「いいよ。何ができるかな？」  
R児「タイヤにするんだよ」  
R児は紙に車を描くと、タイヤの部分にボタンをのせて、  
R児「車ができた」と喜び、教師とT児に見せた。  
T児「ほんとだ！すごいね」  
教師「R君、いいこと考えたね。きらきらのボタンでタイヤを作ったんだ！」と認めた。  
それを見ていたK児、Y児は、「どうやって作ったの？」とR児に聞きながら作り始めた。車ができると  
K児「今度は電車も作る。先生、紙ちょうだい」と言う。  
教師「紙ならここにたくさん置いてあるよ・電車なら、箱とか作ってもいいんじゃない？」と他の材料も提示した。  
すると、K児「う〜ん、箱にする」と箱を探し作り始めた。Y児はK児が電車できると、  
K児「先生、線路がほしい。大きいダンボール出して」と言う。  
教師「ダンボール？どうやって使うの？」と聞くと、  
K児「ダンボールに線路を描いて走らせるの」と言う。  
教師「なるほどね」と開いてあるダンボールを出し、  
教師「これでいい？」と聞くと、  
K児「うん」とダンボールにマジックで線路を描き始めた。  
Y児「おれもやっていい？」  
K児「いいよ」と二人で線路を描いていた。  
①Y児「駅もいるよね」  
K児「そう、そう。あとさ、駅にはさ、ラーメンを食べるところがあるんだよね」  
Y児「信号もあったよね」と話しながら作っていく。  
R児、T児も線路を見ると、  
R児「おれもやりたい」とK児に言う。  
K児「いいよ」と受け入れ、4人で作り始める。  
R児「のぞみとかも作ろうよ。こっちはのぞみが走る線路ね」  
T児「いいよ」  
R児「わかるようにのぞみって描いとう〜」

#### 考 察

- ❑ 教師は、ご馳走つくりのためにいろいろな材料を用意しておいたが、いつもとは違うものが置いてあることで、幼児は想像力を働かせ、新しい遊びを考え出すことができた。遊びを盛り上げたい時や幼児が新しい刺激を求めているときに、幼児の反応や遊びの展開を予想しながら、幼児のイメージがわくような素材を用意しておくことが大切であると感じた。
- ❑ 一緒に作る仲間が増えたことで、①のように、友達との会話をしながら、思いをめぐらしたり、さらに考えたりしていく姿があった。友達の言っていることを聞いたり、行動を見たりしながら、自分はこうしようかなと思いをめぐらして自分の中に取り入れたり、新しいことを思いついたりしていることがわかった。



#### 「どうやって作ろう？」 6月4日

昨日のダンボールの線路を目に付くところに設定しておいた。登園すると、線路の周りに集まり、遊び始める。しばらくすると、

T児「モノレールが作りたい」と言う。  
教師「モノレールってどうやって動くの？」  
T児「あのね、こうやって上を走るんだ」  
T児「うん。でも、どうやって作ろう？」  
教師「箱で柱とか作ってその上を走るっていうのは？」  
T児「そっかあ」と教師と一緒に箱を取りにいく。  
T児「どれにしよう...」  
教師「う〜ん、たくさんあるね。同じ箱とかだと、高さが一緒だよ。牛乳パックとかさ」  
T児「じゃあ、これとこれにする」とティッシュの箱と牛乳パックを持っていく。  
T児はR児に「ねえ、モノレールが作りたい」  
R児「いいよ。じゃあさ、こうやって作るの？」とT児の持ってきた箱を立てながら相談を始めた。  
T児「先生、あのさ、ひもがいる。ひもちょうだい」

教師「どんなひものか？ひもは毛糸とかタフロープとか、紙テープとかあるけど…」と置いてあるところを知らせ、見せると、

②T児「紙テープはすぐに破れるもん。毛糸にする」と毛糸を持っていき、作り始めた。牛乳パックやティッシュの箱を柱にして、モノレールに見立てた箱を毛糸でつるしてロープウェイのように作ろうとしていた。

T児は「ここを押さえて」とR児に言い、T児が手で押さえ、R児が箱をテープで貼っていく。

R児「こうやると動くよ」と箱に紙テープで毛糸を通すところを作ったりしていた。

教師「いいこと考えたね。これなら、こっちにいるお客さんがこっちの駅に行けるね」と認めると、

T児「でも、(牛乳パックが)すぐに倒れちゃう」と言うので、

教師「そうか。じゃあさ、③ガムテープでとめてみたら？セロテープより強いよ」と声を掛けると、

T児「そうか」とガムテープを取りに行き、再び作り始めた。しかし、毛糸が長すぎて電車が下についてしまう。

T児「ねえ、下にくっついちゃう」

R児「毛糸が長いんだ。もっと短くしよう」と毛糸を短くする。しかし、今度は柱にした箱が引っ張られてゆがんでしまった。

T児「なんか、変なふうになっちゃった」

④教師「箱と箱の間が広がりすぎるんじゃない？こうやって間にもう一つの柱をつけたらどう？」と真ん中に箱を立てて見せた。

T児「はってみる」ともう一つ柱を増やすと下にはつかなくなったが、電車が途中までしか動かない。

R児「ねえ、こっちには動かないよ」

T児「こっちにもモノレールをつける」ともう一方にもモノレールに見立てた箱をつるしていた。

完成すると嬉しそうに、T児「先生、できた！見て」と教師に言い、何度も動かして見せた。

### 考察

②のように、何度か使ったことのある物は、同じ紐でも幼児なりに、破れやすいなどと特徴を考え、使い分けている姿があった。様々な質のものを用意し、幼児に使わせることで幼児なりに考えて使うことができる感じた。また、あまり使ったことのない素材では幼児に考えさせるだけでなく、③のように教師が「これを使うとどうかな？」と提示し、自分のイメージ通り

に完成する喜びを味あわせていくことも大切ではないかと感じた。

❖ 幼児が考えたことやイメージしたことを教師が受け止めて認めたり、新しい材料と一緒に探していくことで、さらにイメージが広がってきたと思う。また、教師が幼児の思いやイメージが実現できるように考えを出したり、一緒に作ったりしていくことで、完成できた満足感を得られることができた。

❖ 教師は、思い通りに作れるようにという思いから、④のように考えをすぐに伝えてしまったが、幼児の考えを引き出したり、一緒に考えたりしていくことで、幼児なりに考えたり、更に試したりしてより、探究心を膨らませることができたのではないかと反省した。



### 事例のまとめ

#### イメージが広がる素材を用意して

❖ 教師は幼児にとって扱いやすく、興味を持てるような素材を目に付くところに設定しておいた。幼児は、置いてある素材から、想像力を働かせ、いろいろなものをイメージしたり、見立てたりする姿があった。教師が幼児のイメージが広がったり、製作意欲への刺激となるような素材を用意したり、幼児のイメージに共感し、一緒に実現していくことで、幼児は満足感を得て、さらにイメージを広げたり、次の活動に意欲的に参加したりしていきけるのではないかと感じた。

#### 物の特徴をとらえて

❖ 幼児は、遊びでいろいろな物を何度も使いながら、それらの物の性質を幼児なりに理解し、用途に合わせて考えたり、選んだりしていることがわかった。教師も「これは〇〇の時に使ったね」と試行経験を思い出させたり、言葉が素材の性質を感じられるようにしたり、選んで使える環境にしたりしておくことが大切であると感じた。

## ポイント

保育者が用意したボタンを、男児が車のタイヤに見立てて使うなど、子どもたちは自由な発想でイメージを膨らませながら素材とかがわっています。そこから発展し電車やモノレールを作りたいという思いの実現に向けて、試行錯誤しながら適切な素材を選別している様子もよく現れていますが、同時に保育者の援助のあり方を考えるためのよい事例にもなっています。